
白と黒と、そして天使

洋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白と黒と、そして天使

【ZPDF】

Z0908B

【作者名】

洋

【あらすじ】

笑顔の裏に寂しさを隠す蘭。そんな蘭の“白や”に、自分の“黒さ”を痛感し、なげやりになる哀。そんな彼女たちの白と黒は、ある日『風邪』をきっかけとして、新たな色を生み出す。白と黒、光と闇が複雑に絡み合う中で、哀が見いだしたものとは・・・？

灰原哀は、いつも通りその日の朝を迎えた。

いつもと何ら変わりない朝。

隣のベッドでは阿笠博士が、心地よさそうにいびきをかいて眠つてい。

ベッドサイドの田覚まし時計は、そのけたたましいベルの音を早く鳴らしたいとうずうずしながら、秒針を動かしている。

ほんの少し開いたカーテンの隙間から、朝日が差し込む。

今日は、昨日のような雨にはならないだろう。

本当にいつもと変わらない、穏やかな、一日の始まり。

こや、その日を迎えて、あんまり実感が湧かないものね・・・

博士を起こすのを田覚まし時計に任せ、哀は寝室から出た。
まあじうせ、今日も田覚ましのベルは博士の眠りに勝てないだろうから、結局いつも通り自分が直接起こしに行くことになるだろうが。

すべてが、いつも通りの朝。

しかしそれでも、今日は哀にとって、特別な日。

哀は洗面所で顔を洗つた。

少し風邪気味のような気がした。

しばらく、鏡に映る自分の顔を見つめる。

今日は『富野志保』の、年に一度の誕生日・・・

帝丹高校の、振り替え休日の日。

蘭はその日、探偵事務所の棚の整理をしていた。

本当は園子とショッピングの予定だったが、京極さんが帰つて来て
いると連絡があつたため、その予定はキャンセルされてしまった。

いいなあ園子は、幸せそうである。

蘭は、少しうらやましく思つた。

そのとき、本と本の間に、ほとんど埋まるように挟まつていた古い
アルバムを見つけた。

蘭は片付けの手を休め、吸い寄せられるよつてそのアルバムを開いた。

中の写真は、蘭がまだ小学生の頃のものだった。

母が家を出る直前で、両親と自分が仲良く写つていて写真がたくさん貼つてある。

しかしそれよりも数の多い写真は、新一と一緒に写つていて写真たちだった。

今日は小五郎は一日酔いでまだ布団の中で、コナンは学校で、事務所には蘭以外誰もいない。

そんな静かな空気の中、蘭は懐かしそうに一枚一枚の写真を眺めていく。

そのとき、ある写真に目が留まった。

幼い自分と新一が、仲良く並んで写つていて。

その後ろには、動物園の入り口が見える。

ふと、蘭の記憶が甦つた。

新しくできた動物園に、蘭の家族と新一の家族とで遊びに行つた日

のことを思い出した。

しかし蘭は、その次の日のことまで覚えている。

そういえば私、この次の日に風邪で熱出しちゃったんだっけ

蘭は思わずくすりと笑った。

蘭はどうしても動物園に行きたかったがために、風邪気味だったことを誰にも言わなかつた。

そのため次の日にその風邪が悪化し、蘭は何日も高熱にうなされたという、今思い出すと何ともしようもない話である。

写真を見ると、10年前のちょうど昨日の日付がついている。つまり蘭が熱を出した日は、10年前のちょうど今日だ。

そのとき突然、懐かしい幼馴染みの声が頭に響いた。

『全くオメエは、無理ばっかしやがつて』

蘭は一瞬、新一のその言葉をいつ聞いたのか思い出せなかつた。しかし答えはすぐ見つかつた。

それはあのとき、風邪で寝込んでいる蘭の布団の脇についてくれた新一が言つた言葉だつた。

そのとき携帯が、着信を知らせるメロディを奏でた。

画面には『新一』と表示されている。

「新一！？」

蘭は思わず大声で電話に出た。

受話器の向こうの相手はいささか驚いた様子だつたが、すぐにいつもの脳天気な声が聞こえてきた。

『よお蘭！久しぶり』

その声に蘭は微笑み、またいつも会話が始まる。

「ほんとに久しぶり。最近全然連絡なかつたから、心配したじやない。もつと定期的に電話してきなさいよ」

すると、新一はふてくされたように返してきた。

『悪かつたな。こつちだつて忙しいんだよ』

しばらくそんなやりとりをしたあと、蘭は唐突に言った。

「ねえ新一。今日は何の日か覚えてる?」

蘭は、僅かな期待を込めて返事を待つ。

しかし新一は、素つ頓狂な声を出した。

『今日? さあ・・・誰かの誕生日かなんかか?』

予想は出来たが、それでもがっかりする蘭。

『やつぱり覚えてないよね・・・。別にそんな特別な記念日つてわけじゃないんだけどわ』

『何だよ、気になるじゃねーか。教えろよ』

蘭は苦笑しながら答えた。

『覚えてるかな・・・? 10年くらい前に、動物園に行つた次の日にさ、私が熱出しちやつた日なんだ、今日』

しばらく、返事は返つて来なかつた。

やはりあの推理バカに、そんな些細な思い出話なんか言つても無駄だつたか。

蘭がそう思つたとき、いきなり新一が声を上げた。

『ああ! 思い出したよ! 確かオメエ、学校で体調悪くなつて、俺が家まで送り届けて看病してやつたんだつけ』

その言葉は蘭にとつて、大いに意外だつた。

『そ・・・そだつけ・・・?』

『そうだよ! いやああのときは大変だつたよ。家におつちやんもおばさんもいなくてさ』

あははは、と蘭は笑つた。

新一も笑う。

笑つたあとに、蘭は無性に寂しくなつた。

あの頃は側にいて当たり前の存在だつたのに、今はこうして数分間声を聞くだけの、幼馴染み。

今は、新一との思い出がすべて辛い。

蘭のそんな気持ちを感じたのか、新一が心配そうな声で言った。

『オメエ、元気ないぞ？どうした？』

蘭はその言葉にふと我に返ると、慌てて答えた。

『そ、そんなことないよ？ちょっとぼーっとしてただけ！』

しかし、そんな蘭の『こまかしば』、新一には通用しなかつた。

『ウソつけ。オメエの様子くらい、声でわかるだよ。全くオメエは、無理ばっかしやがつて』

全くオメエは、無理ばっかしやがつて・・・

受話器をとおした新一の声と、10年前の新一の声が重なる。

昔から少しも変わらない、優しい声・・・。

蘭は涙が溢れた。

『なっ・・・お前、泣いてんのか！？』

蘭は、ひっくひっくと嗚咽を洟らす。

新一は、ただうろたえた。

「新一、早く返つて来てよ・・・寂しいよ・・・」

『ナンは溜め息をついて、携帯をポケットにしました。

彼は休み時間、ひとり小学校の裏庭で蘭に電話していたのだ。また自分のせいで、蘭を泣かせてしまった。

『へり『ナン』として蘭の側にいても、『新一』にはかなわない。

『ナン』では、蘭の不安をどうしてやる?とも出来ないのだ。

『ナンの心は重く沈んでいた。

放課後、少年探偵団はにぎやかに玄関を出た。

相変わらず元気な3人の後ろを、哀とコナンは並んで歩く。

哀は今日一日中、姉のことで頭がいっぱいだった。

昔から、誕生日は必ず姉が祝ってくれた。

ほとんど記憶がないころに親を亡くして、祝ってくれるのは姉だけだったのだ。

それでも良かつた。

誕生日は一日中、嬉しくて嬉しくてしょうがなかつた。

だが今年はちがう。

もう姉はいない。誰も祝つてはくれないのだ。

それも当然ね。私みたいに“黒”に染まつた人間が生まれた日なんて、誰も嬉しくないもの・・・

哀は、自分を嘲^{あざけ}り笑つた。

こんなことで悩んでも仕方ないのに。

その思いを振り払うように顔を上げると、隣りを歩くコナンもまた、思い悩んだ表情を浮かべているのに気付いた。

きつと彼女のことを考えてるんでしょうね。眩しいくらいの“白”を持った、あなたの大切な彼女のことを

哀の脳裏に、蘭の優しい笑顔が浮かんだ。

真っ黒な自分とは正反対の、透き通るほどに白い蘭。

自分は、彼女が苦手だ。

向き合つと、彼女の“田”の眩しさ、田が潰れてしまつのような気がする。

しょせん闇は、光の前では無力なのだ。

次々と泣きたくなるような感情が溢れてきて、哀は唇を噛んだ。そんな哀の様子には気付かず、コナンは俯き加減で哀に話しかけてきた。

「なあ、灰原。今日蘭が電話で、『寂しい』って泣いたんだよ。もう、待たせるのは限界なのかな」

どうして私にそんなことを聞くの？

そんなの、誰にもどうに也可能のことじゃないじゃない。

私だって、お姉ちゃんがいなくて寂しいわよ。

工藤君みたいに電話なんかしてくれないし、もう永遠に帰つて来ないのに。

私はこんなに必死に寂しいのを我慢してゐのと、何でそんなこと言うのよ……。

何で、ようつにせよつて誕生日の田……！

「……知らないわよ、そんなこと」

哀は吐き捨てた。

いつも彼女らしくない答えに、コナンは顔を上げる。

「……え？」

哀の心はもう、限界に達していた。

これ以上コナンと一緒にいることが、耐えられない。

「ごめんなさい。今日は先に帰るわ

そう言つと哀は駆け出した。

前を歩く歩美たちを追い抜き、校門に向かつ。

コナンは慌てて後を追つた。

「待てよ灰原！ 一体どうしたんだよーー？」

日頃から走り慣れているだけあって、コナンはあたつと哀に追いついた。

その腕を掴んで引き止める。

「どうかしたのか？オメエ今日ちょっと変だぜ？」

「ちょっと風邪気味なだけよ！いいから離して！！」

哀はコナンの腕を振り払おうとする。

もう一度説得しようと、コナンがぐいっと哀の腕を引つ張ったとき

・

「あああ！」

バシャッ

周囲に水しぶきが上がる。

哀は校門の前のアスファルトの水溜まりに倒れ込んでしまった。

「灰原！？」

コナンが慌てて助け起こしたが、全身びしょ濡れだった。

他の3人も、驚いて駆け寄つてくる。

「哀ちゃん！大丈夫！？」

「灰原さん！」

「うわっ！びしょ濡れじゃねーか！」

哀は無言で、服に染みこんだ水を絞つた。

髪からはポタポタと水滴が落ちている。

コナンは謝つた。

「灰原、ごめん・・・」

「気にしないで。暴れた私もいけなかつたから」

その口調からは、何の感情も感じられない。

「とにかく、保健室でタオルと着替えを

そう声をかけたコナンだったが、次の瞬間、哀が信じられないことを言った。

「「」のまま帰るわ」

みんなは驚き、日々に心配の声を出した。

「だめだよ哀ちゃん！そのままだと風邪ひどくなっちゃうー。」

だが哀は、大丈夫だと言い張っている。

たまりかねた光彦が言った。

「灰原さん、もっと体をいたわって下さい……。」

「うるさいわね！大丈夫だつて言つてるでしょー！？」

哀のものすごい剣幕けんまくに、光彦は何も言えなくなつてしまつた。

その様子を見たコナンが溜め息混じりに言つた。

「わかった。オメエ頑固だからな。その代わり、俺が送つてくる。それでいいだろ？」

哀は「コナン」と田を合わざずに答えた。

「「」自由にどうぞ」

まだ他の3人は納得していないようだったが、コナンは無理矢理言
い聞かせた。

「じゃあオメーら、また明日な」

去つていくコナンと哀の後ろ姿を心配そうに見つめながら、光彦は
ポケットの中に入っているモノをぎゅっと握りしめた。

受け取つた。

「ホラ、これ着ろよ」

そう言つとコナンは、自分の上着を哀に差し出した。

哀は、断つてまた口げんかになるのが面倒になつて、素直にそれを
受け取つた。

一人は、始終無言で歩いた。

哀はうつむいて、一度も顔を上げない。

そうしている間にも、朝から風邪気味だつた体はどんどん冷えて、
ぞくぞくしてきた。

結局そのまま何も話さないうちに、阿笠邸の前に着いてしまった。
いそいそと門を入ろうとする哀に、コナンは言った。

「灰原、ほんとにごめんなさい。」

そこで哀は動きを止め、初めてコナンの方を向いた。

その口元が、悲しそうな笑みを浮かべる。

「私こそごめんなさい。・・・全く、最悪な誕生日だわ」

その言葉に、コナンは目を見開く。

しかしそんな彼の表情を見る前に、哀は門をすり抜けて走り、バタンと玄関のドアを閉めた。

哀はそのままドアにもたれ、荒い息をした。

頭がクラクラする。体も熱っぽい。

外には、呆然と立ち尽くすコナンだけが残されていた。

「ただいま・・・」

さもざまな理由で重苦しい気持ちを引きずつて、コナンは帰宅した。

「おかげりコナン君！」

ドアを開けるのと同時に明るい声が帰ってきて、コナンは安心した
といふか意外だったというか・・・。

蘭は小五郎と一緒に事務所にいた。

まだ一日酔いから解放されない父親にコーヒーを出してやっている。
その表情はすがすがしかったが、どこか影があった。

「コナンは罪悪感でいっぱいになる。

「ボク、ランドセル置いてくるね」

そう言つとコナンは蘭に背を向け、階段を昇つていった。

自分の部屋でもある小五郎の部屋に入つてランデセルを降ろしたとき、いきなり蘭が入ってきた。

「どうしたの蘭姉ちゃん？」

「お父さんが煙草取つてこいつにのせるよ。あ、あつたあつた蘭はそつまつと小五郎のベッドの上に放置してあつた煙草の箱を掴んだ。

そのまま部屋を出ようとしたのを、コナンが止める。

「ね、ねえ蘭姉ちゃん・・・」

蘭は振り返つてコナンに笑いかけた。

「なあに？ コナン君」

その笑顔を見たら、コナンは言葉が出てしなくなってしまった。脳裏に、わざわざの電話の声が甦る。

寂しいよ・・・

「コナンはやつとの思いで言つた。

「・・・ボクがいるからね？」

蘭は一瞬きよとんとしたが、その目から涙が一粒こぼれた。

蘭自身も不意打ちだつたらしく、彼女は自分の涙に驚いていた。

「なにこれ・・・何で出でくるの？」

コナンはその様子を、悲しげに見つめている。

蘭は無理に笑顔を作つて言つた。

「あはは、『めんねコナン君。いきなり泣いちゃつて。』『飯の準備とか、お手伝いしてくれるつて意味よね？』

コナンも無理に笑う。

「うんー今日はおじさんのお世話が大変そだからさ」

だが、蘭の涙は一向に止まらない。

「ありがとう。・・・『めんね泣いちゃつて。』コナン君の言葉、勘

違ひしちゃつて。最近ちょっと・・・寂しいかい

そつ言つてまた微笑む蘭の姿に、コナンの胸が痛む。

「おーい蘭！まだかー？」

階下から小五郎の大声がして、蘭は何か涙を拭^{ぬぐ}うと急いで部屋を出て行つた。

しばりべじつと佇^{たたず}んでいたコナンの耳に、携帯の着信音が聞こえた。

博士からだつた。

哀に何かあつたのではないかといふ嫌な予感を感じつゝ、コナンは電話に出た。

「博士へどうかしたのか？」

受話器の向^{むか}いの阿笠博士は、困り果てた声で言つた。

『実は哀君が熱を出してしまつての。いろいろ手伝つて欲しいんじやが、今から来てくれんか？』

嫌な予感が的中してしまつた。

あのバカ。やつぱり無理にでも着替えをやよかつた・・・

今哀に会つのは少し気まずいが、哀がこいつなつたのは自分のせいでもあるわけで、コナンは「行く」と即答して部屋を出た。

それに、どうせここにいても、蘭の泣き顔を見るのは辛いだけだから。

玄関のチャイムを鳴らすと、すぐに博士がドアを開けた。

「おお、新一君。すまんのう。わしもどうじいかわからなくて
彼は相変わらずうつむいたえている。

「いじつていじつで。で、灰原は？」

「寝室で寝ておるよ」

哀はベッドに横になつて、苦しそうに喘いでいた。

意識もはつきりしていないようで、時折うわごとを言つている。

コナンと博士が心配そうに見守つていたそのとき、哀の口からが細い声が洩れた。

「・・・お姉ちゃん・・・」

それを聞いて、コナンは今日の哀の不自然さを全て理解した。

そつと、博士につぶやく。

「博士、こいつ今日、誕生日らしいんだ」

博士が驚いて大声を出す。

「なにい！？ほ、本当か！？」

「ああ。さつき言つてたよ。でも、万一組織のやつらが嗅ぎつけられるといけねえから、ずっと言わなかつたんだううよ。たぶん今まで明美さんに祝つてもらつてたんだろうけど、もつ彼女はいないから・・・。こいつも、寂しかつたんだな・・・」

博士はコナンに哀を頼み、薬を買ひに出て行つた。

しばらくすると哀は少し落ち着き、整つた寝息を立て始めた。

コナンは、ずっと側についていた。

哀は夢を見ていた。

姉が笑顔で自分に言ひ。

『志保、誕生日おめでとう』

そこで、哀はふつと田を覚ました。

さつきよりは、だいぶ体が楽になつてゐる。

「起きたか。どうだ、具合は？」

その声に一瞬驚いた哀は、ベッド脇に座つてゐるコナンに氣付いた。

「・・・博士は？」

「薬買いに行つてゐよ。でもこのぶんだと、さつと売り切れてあちこち探し回つてゐんだろうな」

「そう・・・」

それからまつまつととつとめのない会話をしたあと、いきなりコナンが切り出した。

「さつきは」めんな

哀は首を振つた。

「気にしないで。もともと風邪気味だつたんだから」
するとコナンは、少し困つた顔をして言つた。

「いや、さうじゃなくて・・・お前も寂しかったのに、察してやれ
なくて」

哀はしばらく意外そうな顔でコナンを見つめていたが、やがてふつと笑つて天井に視線を向けた。

「私も、大人げなかつたわ。でも私が寂しかつたのは、それだけじ
やないの」

「・・・え？」

哀は目をつぶつて話し始めた。

「嫉妬してたのよ。あなたの大切な彼女の“白さ”に。私は真つ黒
の人間だから、うらやましくて」

それを聞いたコナンが何か言いかけたとき、玄関のドアが開く音が
した。

「いやあ、すまん一人とも一やつと薬を見つけてきたぞ！」
博士の声の他に、もう一人の声がした。

「おじやまします」

哀は驚いて、体を起こした。

「今のが声つて・・・円谷君？」

博士と光彦が、寝室に入ってきた。

哀は^{あせん} 咄然としている。

「コニコと光彦を招き入れる博士とは対照的に、当の本人はもじもじしている。

その手には、小さな白い包みが握^握られていた。

「一体どうしたんだよ光彦？」

コナンはそう尋ねたが、光彦は照れて言葉を濁した。

「えっと・・・その・・・」

埒^{らち}が明かない光彦の代わりに、博士が説明した。

「実はさつき薬を買いに行つたときに、たまたま彼に会つたんじゃ。そこでうつかり、今日は哀君の誕生日だと口を滑らせてしまっての。そしたら彼が、どうしてもプレゼントを渡したいと言つてきて」

光彦は顔を真つ赤にして俯^{うつむ}いた。

小さな包みを握る手の力が、さらに強くなる。

哀はそんな光彦を、まだ咄然と見つめながら言つた。

「円谷君が、私に？」

光彦は「クリ」とうなずくと、意を決して哀に歩み寄つた。

「あの、灰原さん、お誕生日おめでとうございますー！」

そう言つと彼は、持つていた白い包みを哀に差し出した。哀は一瞬戸惑つたが、笑顔でそれを受け取つた。

「ありがとう。開けてもいいから？」

それを聞いた光彦の表情はぱあっと明るくなり、嬉しそうに返事をした。

「はい！」

哀は包みの口のシールをはがすと、中に入っているものをそつと取り出した。

それは、真っ白な天使の置物だった。

それを掌^{てのひら}に乗せて眺める哀の表情は、ふつと陰つた。悲しい笑顔でつぶやく。

「きれいな天使・・・。今の私に、一番似合わないものね」
その言葉を、コナンが否定した。

「やめるよ、自分のことやうこつぶつと言つのは」

だが哀は続ける。

「あら、だつて本当のことじやない。黒い私に、純白の天使は正反対の存在だもの。そうね・・・言つならば私には墮天使のほうが合つてる」

「だから、自分が黒いとか言つなよ！」

コナンが何と言おうと、今の哀の心理状態ではそんなこと無理だつた。

自分の周りの、心に汚れのない人々との平和な日常の中にいると、自分がいかに黒く邪悪な存在かを思い知らされる。

自分の周りに溢れる光が眩しくて、疲れる。

光彦が純粹な気持ちでくれたプレゼントだとわかつていても、それは天使からかけ離れた自分を皮肉る、たちの悪い嫌がらせのように感じてしまう。

「あの・・・お一人とも、わざから何を言つてるんですか？」
その言葉に我に返ると、光彦がきょとんとこちらを眺めていた。
「僕は灰原さんに天使、似合うと思いますよ。そう思つて買ったんですから」

思いがけない光彦の言葉に、哀は俯いて、手の中の真っ白な翼を見つめた。

「私に、天使が似合う?」
「いやオメエ、これ今日買ったのか?」

そうコナンが問うと、光彦はまた少し顔を赤らめた。

「いえ、実は・・・ずっと前に買ったものなんです。でもなかなか渡す勇気がなくて。そしたらまたま博士に、今日は灰原さんの誕生日だつて聞いて・・・」

照れ笑いを浮かべながら、光彦は楽しそうに続ける。

「灰原さんは優しくて強くて、笑った顔が本当に天使みたいだなって思つて」

光彦の温かい気持ちを聞いて、哀の心は少しやわらかくなつた。
「嬉しいわ。ありがとう。それからさつきは怒鳴つたりしてごめんなさいね」

哀は自然と優しい笑みを浮かべて光彦に言つた。

光彦の顔がほころぶ。

「いえ、気にしないで下さい！」

哀の笑顔を見て、光彦は思つた。

やはり哀は、自分にとつての天使だと。

光彦が帰つたあと、いつの間にか寝室から出て行つていた博士が、
薬とお粥かゆを用意してきた。

哀は天使の置物を大事そうにベッド脇のテーブルに置き、しばらく
微笑みながら眺める。

博士はキッキンにスプーンを忘れたと言つて、再び姿を消した。

哀とコナンは、穏やかな表情で向き合つた。

コナンが言う。

「よかつたじゃねーか。墮天使じゃなくて」

哀は苦笑した。

「まあね」

まさか自分が、誰からあんなふうに思つてもりえているなんて、
夢にも思つていなかつた。

もしかしたら自分は、闇の中に一人ぼっちだと勝手に思つていただけなのかもしれない。

いつもにこにこして、素直なだけが、天使の条件じゃないのかも
しないわね

温かく優しい気持ちが、心を満たしていく。

だが哀は、いきなり表情を切り替えて言葉を継いだ。

「さあ、あとはあなたの問題だけよ。今日はもう大丈夫だから、早く彼女のところに帰つてあげなさいよ。寂しがつてるんでしょ？」

だが今度は、コナンが苦笑する番だった。

「いや、蘭にはここに泊まるつて言つてきちまつたから。それに俺、オメーにいろいろ迷惑かけちまつたし、プレゼントも何も持つてないからや、せめてもの気持ちで、今日はついてやるよ」

だが、哀の表情は一層真剣になつた。

「逃げてはだめよ、工藤君。『自分の運命から逃げるな』って言つたの、あなたじゃない」

コナンはもう、苦笑する余裕すらない。

「でも・・・俺がいたつて、蘭には『新一』じゃなかつたら意味ないんだ」

そのとき哀の表情が険しくなり、コナンに向かつて声を荒げた。

「あなた、あれだけ彼女の側にいて、まだわからないの！？『誰かは関係ないじゃない！』例え『コナン』の姿でも、泣いてる彼女の側にはいられるはずよ！」

その言葉に、コナンの心は大きく揺らいだ。
しばらく言葉が出ないまま、沈黙が流れる。
静かな空気の中に、哀の声が響いた。

「『藤新一』として帰つてあげられないんだから、せめて『江戸川コナン』としては、帰つてあげなさいよ」

その言葉はコナンの心を揺るがしただけでなく、奮い立たせた。
彼は部屋を飛び出した。

スプーンを持つた博士の横をすり抜け、荒々しく玄関のドアを開けて、毛利探偵事務所まで一目散に駆け出した。

その様子を、窓から温かい瞳で見守っていた袞は、不思議そうな顔の博士に言った。

「彼、彼女のところに帰ったわよ」

毛利探偵事務所では、蘭が夕食の片付けをしていた。
父は急な依頼で外出中のため、先ほど独りぼっちの晚餐を終えたところだった。

コナンも、博士の家に行ってしまった。

「コナン君、ここにいてくれるって言つたのにな・・・

『ボクがいるからね』といつ言葉を聞いたとき、一瞬心を見透かされたと思った。

たまらなく寂しい心を。

「もう！こんなことでウジウジするなー」

蘭は、また溢れそうになる涙をこらえるために自分に言い聞かせた。そのときだった。

バタンッ

ドアが開く音がして振り返ると、そこには息を弾ませたコナンが立っていた。

「蘭！・・・姉ちゃん」

蘭は驚いて言つた。

「コナン君！？どうしたの？今日は泊まるつて……」

そこに立つコナンの姿が、何故か幼い日の新一の姿に重なつた。

「やっぱり、今日は帰つて來たんだ。……蘭姉ちゃん、無理ばつかするからさ」

本当に、言つこと新一そっくりね……

蘭は、心中でくすりと笑つた。

さつきの寂しかつた心がうそのよつに晴れ渡つた。

蘭は氣付いた。

自分はこの少年が帰つて來てくれて、たまらなく嬉しいんだ、と。
「やあね！無理してなんかないわよ？」といふでコナン君、晩ご飯食べた？

「あ・・・まだ」

蘭は一度外しかけたエプロンを再びつけた。

「待つて！残り物しかないけど、急いで作るから

鼻歌交じりに料理をする蘭の後ろ姿に、もつ寂しさの影はなかつた。

コナンはそれを見て、帰つて來て良かつたと思つのだつた。

数日後、コナンは阿笠邸にいた。

灰原のお気に入りの天使の置物は、リビングのテーブルに置かれている。

窓から差し込む陽光をまとつたその白い翼は、今にも羽ばたきそうだ。

その横でコナンが、すっかり回復した哀に包みを手渡していた。

大きさの割に軽い包みに、哀は不思議な顔をした。

「これは？」

コナンが意気揚々と答える。

「蘭からの誕生日プレゼントだよ。俺が蘭にオメヘの風邪のことを話したら、急いで用意してくれたんだ。いいから開けてみろよ」コナンに急かされるままに、哀は包みを開けた。

そこに入っていたのは、白い毛糸の

「・・・マフラー？」

「手編みだぜ？」

それは、ふわふわと肌触りの良い真っ白なマフラーだった。素直に喜べず困惑つ哀の目の前に、一枚の紙が落ちた。

哀ちゃんへ

お誕生日おめでとう！

これから寒くなるから、風邪には気を付けてね

蘭より

哀はふっと微笑んだ。

真っ白な彼女らしい、真っ白なプレゼント。

「哀君、付けてみてはどうじゅ？」

博士が「コニコ」と言ひ。

「でも・・・」

「いーからいーから

コナンは半ば強引に、そのマフラーを哀の首に巻いた。

「どうだ？」

「・・・温かいわ」

3人の間に、穏やかな時間が流れれる。

哀は、久しぶりに幸せを感じていた。

「じゃ、俺からもプレゼント」

そう言つとコナンは、何やらポケットを「ゴソゴソ」し始めた。

次の瞬間、哀の頭上に何かが降り注いだ。

「え！？」

哀の目の前に、たくさんの白い羽根が舞つてい。

それはコナンが試行錯誤してやつと思いついた、精一杯のプレゼントだつた。

「もう自分のこと堕^{ハシ}天使とか言つんじゃねーぞ？」

「・・・ええ」

天使の翼からこぼれた羽根が舞つ中、哀はすがすがしく頷いた。
博士は心底嬉しそうで、笑顔が絶えない。

それもそうだ。

彼は、同じ寂しさを持った一人の姿を、ずっと心配していたのだから。

首に白いマフラーを巻き、肩や髪に羽根を乗せた哀の姿を見て、
コナンが言った。

「お前結構、白似合つてるぞ」

哀は、素直に微笑んだ。

「ありがと」

白い天使の置物が、哀の掌で翼を広げている。

哀はそれを見つめながら、姉と蘭のことを思つていた。

蘭さん、あなたの“白”さが、私の“黒”を薄めてくれているのか

もしれない。

白と黒は対極的でも、時には混ざり合つものだから。
あなたの“白”が、私の“黒”を“グレー”にしてくれているのか
しらね。

“黒”のままでは天使になれなくても、“グレー”なら・・・少し
でも“白”に近づければ、私は天使になれるかしら?
天使になって、天国のお姉ちゃんの使いになれるかしら?

私は、“白”でも“黒”でもない“グレー”で、生きていけばいい
のよね?
ねえ、お姉ちゃん。

哀の手の中の天使が、日の光を浴びて眩しく輝いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0908b/>

白と黒と、そして天使

2010年12月28日08時24分発行